



6月の一般公開を前に、全国キャンペーン活動がスタートしている『剣岳 点の記』。試写をご覧になった方からの感想も続々と寄せられています。

そこで今号では、木村大作監督の補佐として準備段階から奔走されてきた宮村敏正監督補佐を取材。スタッフ側の視点から映画製作を振り返っていただきました。

撮影準備の準備

木村さんが監督として映画を撮るという話を最初に聞いたのは2006年の秋です。そこから原作をもとに測量や山岳関係の資料を手に入るだけすべて集めて下調べし、年明けから北陸地方測量部やつくばの国土地理院まで行って詳しいお話をうかがってきました。つくばでは木村さんと一緒に三角網図や点の記、観測主簿、計算簿など一通り本物を見てきました。

測量については、僕ともう一人僕の下についてスタッフ（助監督・加藤さん）でだいたいの基本をならいました。三角測量の原理だとか、実際にどう計測するのか、望遠鏡を反転してもう1回測り直すといった具体的な部分、機械の扱い方など。わからなかった点は、またスタッフが足を運んでその都度、確認しています。

それから明るる2月に木村さんと菊池淳夫（東映プロデューサー）さんと僕と3人で旅館にこもり、台本を書き上げました。これは準備稿です。役者さんが入り実際に撮影が始まるのは9月ですから、それまで、新しい情報が入るたびに台本は書き替えていきましたし、撮影している間も状況に応じてどんどん設定や台詞は変わっていきました。

3月には实景の撮影に入りました。この段階では小道具のダミーなどが間に合っていないので、経緯儀の箱だけ本物を北陸地方測量部で借りて行きました。本物はとにかく重くて大変でした。撮影時は美術スタッフが軽くつくったダミーを使用しています。

スタッフ・キャストに欠かせない「資料集」

映画製作にあっては、通常、スタッフおよびメインの俳優さんのために資料集を演出部で製本して用意します。撮影時に「あれは、どういうことだっけ？」となつたときに、いちいち参考文献の原本をあたるわけにはいきませんから、すぐに確認できる資料集が絶対に必要なんです。今回のように専門技術や時代考証が重要な場合、資料集もかなりのボリュームになります。撮影スケジュールに合わせてまとめていったのですが、最終的に100ページ超のものが3冊になりました。

測量の仕事はどう説明するか

測量については、その仕事がどういうものなのか、柴崎たちは何をやっているのか、正直言って映画を見た一般人にはわからないと思います。

秋に柴崎と長治郎だけで山に行っているのは下見ですよとか。春になって金作たちといっしょにまた行くけれど、まず27カ所選点して、櫓を立てて、それから観測するんですよという測量の手順を見ている人にしっかりわかってもらおうと思ったら、いくら時間があっても足りません「NHKスペシャル」ではなく、〈映画〉だから。でも資料はキッチリとして、裏付けに手を抜かない。説明台詞ばかりになっても観客は疲れるだけですから、その点台本段階で割り切っています。

雄山神社で金作たちに測量作業の説明をしたりして、「何で選点して櫓そ立てるのに3ヶ月もかかるのか」「27ヶ所やるんだ」「エーッ?!」というような場面もありますが、すべてを説明するというよりも、物語の端々に測量のという仕事の一端を見せていっているつもりです。

たとえば、一番わかりやすいのではないだろうかと考えたのが「三角網図」です。

まず、春に山に入ったとき。ここは原作にない場面なんですけど、柴崎たちは最初に前回古田さんが測量した薬師岳の二等を確認します。そこでまだ線があまり引かれていない「三角網図」が映ります。

それから天狗山から劔岳を選点候補にしているという作業の場面。三角網図に新しい線を引くということをやっている。

それで最終的には、柴崎と長次郎、生田信の3人が遭難しかけて立山温泉に戻ってきた後、柴崎が板の間で新しい線と点が増えている三角網図を見る場面に至る。ここは映画的にわかりやすく点にマチ針を立て、これで27ヶ所選点が終わりましたよと見せる作り方をしています。当時、マチ針を使ったかどうかは知りませんが、あってもおかしくはないかなと思ったので使ってみました。とにかく、この三角網図を完成させたかったんだと見てもらえればいいかなと。

測量作業としては、結局、櫓を立てるところや、選点し、測量しているところなど数回なんです。あとは、冒頭で柴崎が陸地測量部に戻ってくる場面。そんなことはしないだろうという感じで、少しわざとらしいのですが、敷地内で実習をしているという設定で櫓と観測している様子を見せています。



映画のフィクション

それは違うだろうという映画のフィクションはいろいろあります。たとえば、軍服ですが、本当は明治39年に陸軍は制服を替えているのです。この話は39年から40年にかけてのことなので、完全に替わっているかどうか分からない。木村監督に「どうしますか？」と聞いたら、やはり「明治は肋骨がいいよ」とあのフランス式の制服になっています。

また、陸地測量部については、建物自体の平面図は残っていて、2階のどこに測量部があったとか、廊下がこうなっているというのは調べました。けれど、部屋の内部がどうなっていたかは資料に残されていない。

それで本来は、三角科とか、地形科とかで部屋が分かれているはずなのですが、一つの部屋にしてしまい、計算している人の後ろに機材を並べた棚を作ったり、機材を広げて手入れする机を設定したりしています。

それで測量部の雰囲気が出せますし、撮影しやすくなります。いちいち違う部屋に切り替わるというようなまどろっこしいことにならないよう、そういう部分は事実にはこだわらないで、台本段階で工夫します。

他にも、たとえば雄山神社で長次郎が息子をはたく場面がありますが、あれも当初は別の場所だったのが、テンポを早めるためにもう同じところでやっつけてしまおうと変更された部分です。

金作たちが「給金が安い」とか言い出す場面も同じ。そのタイミングで言わないだろう(笑)と思う方もいらっしゃるかもしれませんがね。本当なら長次郎の家に集まる場面などがあって、皆を紹介したところで「そんな給金じゃ・・・」という話が出るというような流れでしょうか。それから、さらに長次郎が金作たちを説得するような芝居があつてとか。

しかし、木村監督は「一刻も早く山に行きたかった」ので、そういう流れには結局しなかった。

とにかく、監督の中でこの映画は山が8割で下が2割なんですよ。原作もそうですしね。山に行くの行かないのという部分は極力省いています。

木村監督が本当に撮りたいのは何だったのか。ぜひ映画館でご覧になっていただきたいと思います。

宮村敏正 (監督補佐)

(みやむら としまさ) 1962年生。演出スタッフとしてフリーで活躍中。

「赤い月」(04年)、「犬神家の一族」(06年)、「憑神」(07年)など。

月刊「測量」2009年4月号より

—本誌には、写真(撮影時のもの等)が掲載されています—